

体験型鑑賞教育の研究

— 鑑賞授業教具「石庭授業セット」について —

緒 方 信 行*

A study on the experiential appreciation education
— About the teaching tool set for the art appreciation class
“Making the Japanese rock garden” —

Nobuyuki OGATA

(Received by October 23, 2015)

はじめに

中学校教師時代、「どのようにしたら、全ての子ども達が絵を上手く描けるようになるか」ということは美術を専門とする教師としての大きな課題であり目標であった。その一見解は平成25年度の教育実践論文で論じた¹⁾が、同時に、生徒への美術鑑賞の授業はどうあるべきかということも常に考えていた課題であった。

当時の美術鑑賞授業は、大まかに分類すると「知識型」「対話型」「クイズ型」などに分類することが出来た²⁾が、知識を重視すれば、子ども達にとって退屈で難しい授業になりかねず、また、子ども達の意見を重視して対象を読み解くことに主眼を置き、鑑賞の内容が子ども達の対話に終始してしまえば鑑賞の深まりという点から疑問が生じる。これらの鑑賞法はそれぞれの長所を持ち、子ども達の鑑賞能力や自主的な活動力を高めていくわけではあるが、もっと子ども達が興味をもち、意欲的に学習し内容的にも質のある鑑賞指導法はないかと思案した。

そこで、子ども達が実際に作者や審査員、研究者などの立場になって体験することで題材に掲げられた課題に迫り、鑑賞内容を理解していくという新しい指導法を考案した。それが標題に掲げた「体験型鑑賞教育」である。本稿では、その一例として鑑賞授業「石庭をつくる」を取り上げ、授業の中で使用する教具「石庭授業セット」について論じ、「体験型鑑賞教育」の有用性について迫っていく。

なお、本稿は平成27年度受託の科研費にもとづく「体験型鑑賞教育プログラムの開発と実践・評価」の一貫としての研究³⁾である。

1. 研究の目的と方法

本研究の目的は、「石庭授業セット」が体験型鑑賞授業「石庭をつくる」の教具として適切であるかということと、教具自体が子ども達にとって魅力を有するかということを明らかにすることである。

そのために、まずは教具「石庭授業セット」の開発を行い、次いで実際の授業で「石庭授業セット」の価値を検証することとした。

なお、ここでは「日本庭園」「枯山水」「石庭」などの言葉が登場する。無論のこと「日本庭園」は全てを含み「枯山水」は「石庭」を含む名称であるが、本稿では、子ども達にも分かりやすいようにと便宜上、主に石と砂で構成されたものを「石庭」、草木を有し水を砂で表したものを「枯山水」、そして「石庭」と「枯山水」以外の回遊式庭園など自然を呈したものを「日本庭園」と称することとした。

2. 研究の実際

本項では、まず開発した教具「石庭授業セット」について論じ、次いでそのセットの有用性を検証した授業の内容と結果について記している。

検証としての授業は、熊本大学教育学部附属中学校の村田崇教諭と南関町立南関中学校の吉田香寿美教諭がそれぞれの中学校で実践した授業（以下それぞれ、村田授業、吉田授業）である。なお、筆者が12年前の平成15年に熊本大学附属中学校で実践発表した授業（以下、緒方授業⁴⁾と、吉田教諭が大学時代に筆者担当の教育実習生として行った授業（以下、吉田実習授業）も参考にしている。

* 熊本大学教育学部美術科

1) 鑑賞授業「石庭をつくる」について

まずは、体験型鑑賞教育として今回取り上げる授業「石庭をつくる」について述べなければならない。以下、授業の目的と学習の流れについて記す。

(1) 鑑賞授業「石庭をつくる」の目的

中学生に「日本の美」や「和風」などについて問いかけて、その答えを期待するのは難しいことなのかもしれない。しかし、それらを具体的に説明できないのは大人も同じであり、そのこと自体、日本に住む者としての基礎基本が身につけていないとは言えないだろう。

ここでは、日本庭園に着目し、実際に石庭づくりを体験させることにより、日本の美について考えさせていく。普段目にする自然や街並も含め改めて日本美の良さを感じさせ、将来、日本の美についてある程度説明ができるようにすることを目標に、日本に住む者としての基礎的素養として本題材を設定する。子ども達は修学旅行で奈良京都を訪れる。修学旅行の意義も改めて考えさせ、修学旅行がひとつの発展学習となるよう期待する。

(2) 鑑賞授業「石庭をつくる」の学習の流れ

全ての実践授業の基本となる緒方授業の展開例を以下記す。

- ① 日本的な街並や庭園を鑑賞する(7分): 日本美について考えさせ、「日本美の良さは何だろう」「わび、さびとは何だろう」「どのような観点があるのだろう」などを問いかける。
- ② 日本庭園を知りその美について考える(10分): 日本庭園の仕組みを簡単に紹介し、日本庭園の良さについて自由に述べさせる。わび、さび、自然、散策性などが挙げられる。
- ③ 石庭について考える(8分): 石庭を紹介し他の庭園と比較させる。わび、さび、自然、抽象性などが挙げられる。
- ④ ミニ石庭を実際につくり日本美を体感する(15分): 本時そしてこれまで学んだことを活かしてミニチュアの石庭を実際につくる。目線を低くするなど臨場感を大切にする。
- ⑤ 代表班の石庭について感想を発表し合い自分の意見をまとめる(5分): 個人あるいは班代表の感想を発表させる。
- ⑥ まとめ(5分): 教師からの説明も交え、個人のまとめをさせて日本美に対する個人の感受と把握を期待する。また、奈良京都への修学旅行への期待感を高揚させる。

2) 「石庭授業セット」の開発

以上の目的と展開のために教具「石庭授業セット」を考案した。本セットは、ミニチュア石庭づくり教具(以下「ミニ石庭セット」)に指導案や板書用掲示カードなども含めたものとし、これを使えば直ちに授業ができるような貸し出し可能なものを目指して開発した。

(1) 「ミニ石庭セット」の木箱の形状について

「ミニ石庭セット」は龍安寺の石庭をもとに考案したが、石庭の置き石と敷き砂がつくる部分を木箱に入れる形とした。名称は図1のとおりである。ミニ石庭の大きさすなわち木箱の大きさを如何ほどにするのかなどを手始めに考えていった。

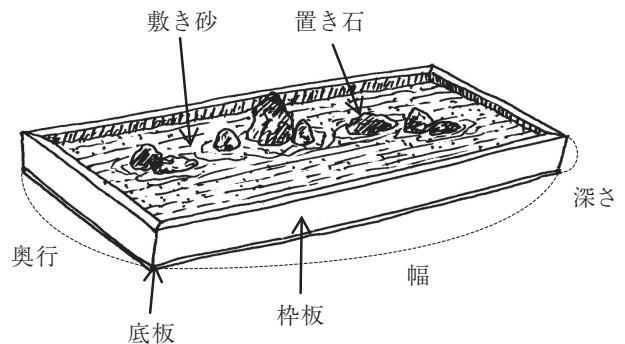


図1 ミニ石庭セットの木箱

① ミニ石庭セット木箱の大きさについて

龍安寺の石庭の広さは、幅25mで奥行10mである⁵⁾。その比率を守りながら、ミニ石庭の大きさとなる木箱の形は、幅35.0 cm、奥行87.5 cmとした。これは実際の大きさの1/35になる。実はプラモデルなどのスケールモデルも一緒に置けば、より真実味が湧くのではと初めは一般的な1/24の大きさを考えたが、子ども達の学習机や展示台の制約も考慮し、一回り小さいスケールモデルの比率の1/35とした。もし、市販されている1/35の人体プラモデルなどを置いたりすれば臨場感もより高まると考えた。

- ・ 1/24 幅 104.2 × 奥行 41.7 cm
- ・ 1/35 幅 87.5 × 奥行 35.0 cm

深さは、4 cmとした。これは木箱の板材のための市販品規格に合わせたためであるが、感覚的にもちょうど良いものとなった。

② ミニ石庭セット木箱の板材について

木箱の枠板として、市販の杉材の幅4 cm、厚み1.5 cmのものを使用した。底板は3 mm厚のベニヤ板である。それらを釘打ちして組み立てた。よって、

- ・外寸は、幅87.5×奥行35.0×深さ4.3 cm
- ・内寸は、幅86.0×奥行33.5×深さ4.0 cm

となる。なお、枠材を木箱の中心に横断させるように組み、木箱の補強とした。12年経過しているが現在も十分な強度を保っている。

③ その他

敷き砂と置き石について詳しくは後述するが、ミニ石庭を試作して確認すると、敷き砂をそれほど深くする必要はなく、2 cm厚のスタイロフォームを敷いて上げ底にすることとした。砂の量も半分ほどとなり軽量化にもつながった。



図2 上げ底のミニ石庭セット木箱

(2) 「ミニ石庭セット」の敷き砂について

敷き砂も龍安寺の石庭を参考にイメージした。感覚的なものではあるが、砂はどれくらいの大きさでどんな色のものが適切かを考えた。また、石庭は敷き砂の文様（以降、「砂紋」）もおおきな特徴であり、どれくらいの幅の砂紋にするのかも検討した。

① 砂の色

敷き砂の色は、多くの石庭で単色ではない。微妙な色が混じり合っているように感じられる。ここでは筆者の地元熊本県玉名郡玉東町の本葉山に産する石灰岩を砕いて生じる砂⁶⁾を使用することとした。この砂は白やベージュ、灰色などがほどよい感じで混じっており微妙な白っぽい色合いを出している。真っ白い砂はきれいすぎる感じで、川砂は茶色っぽさが目立って美しさの点から勧められない。

② 砂粒の大きさ

敷き砂は本葉山産のものと決定し、大きさを選定することとした。いろんな種類の大きさがあったが中でも2 mm程度の粒がミニ石庭の大きさに対してちょうど良い景色をつくった。なお、この砂粒はにわとりの餌として市販されているとのこと。言わば一般的に手に入れやすいということと、子ども達に対してもサプライズと成り得ると考え決定した。



図3 ミニ石庭の敷き砂

③ 砂紋の幅について

砂紋は図4のような厚紙でこしらえた熊手を使用して模様を付けることにした。8 mm, 10 mm, 15 mm, 20 mm目のものをつくり試行したが、8 mm以下では目が細すぎて砂紋が見えづらく、15 mm以上になると砂紋が目立ちすぎるようになり、石の景色を損なってしまうように感じられた。

10 mm目のものを使用することに決定した。なお、敷き砂全体用のものと置き石周りに文様をつくるための大小2種の厚紙熊手を準備した。なお、村田授業ではその2種を1つにしたものを考案し使用した。

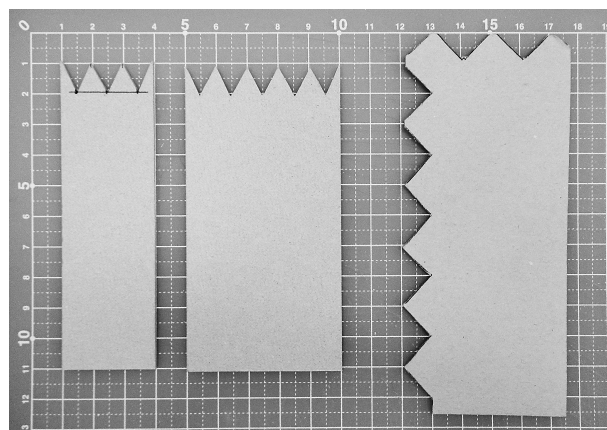


図4 砂紋用厚紙熊手

(3) 「ミニ石庭セット」の置き石について

石庭にとって敷き砂に配される置き石は命とも言うべき大切なものである。石自体が岩や山をイメージさせるなどの景色を持つものが良い。こだわりを持って選定しなければならない。

① 置き石の色と形状

よく石庭風に石を配している庭を見ることがある。しかし、多くの場合黒っぽい火成岩を使ってあり、見た目が美しく魅力的であるとは言い難い感じを受ける。石は川原で取れるものなども検討したが、浸蝕が進んだ丸っぽいものが多く、色も一つ一つは違っていても1個を取り上げてみると多くのものが、

単色のように見えて、石庭としてふさわしい景色を期待することはできない。

ここでも、木葉山産の石灰岩が微妙な色合いを持っており、置き石として相応しいと判断した。また一つ一つの石の色味や表情などが違っており、ちょうど龍安寺の石庭の置き石のような色合いを放っているものもある。置き石も木葉山の麓に転がっている石ころを採用することとした。



図5 木葉山麓の石ころ

② 置き石の大きさ

置き石は「ミニ石庭セット」の面積に合わせた大きさのものとして、大まかに大中小の3種類の大きさに分類して準備した。また、子ども達が教具として使用するときには自らが選ぶことの選択肢が多くなるようにそれぞれの石は多めに用意した。

大きいものは7cmくらいで、中は4cm、小は2cmくらいの石ころである。



図6 ミニ石庭の置き石

(4) 「石庭授業セット」その他の教具類

誰もが直ちに授業が始められるようにということを念頭に、「ミニ石庭セット」をはじめ、授業計画である指導案や黒板の板書例、板書用掲示カードを用意した。

① 指導案

指導案は、緒方授業のものを基本的な学習展開例としてセットに入れ込んだ。今回の検証授業では、それぞれの指導者が自分の思いや子ども達の実態に合わせて学習を展開することとなったが、指導案を含め、提供するセットに各自が工夫を交えて授業を実施できる融通性はあった方が良く考える。

② 板書例および板書用掲示カード

緒方授業で作成したものを基本とした。これは吉田実習授業でも使用したもので、図7はその時の板書例であり、この図を板書例として「石庭授業セット」に織り込んだ。



図7 掲示カードを使用した板書例

(5) 貸し出し教具としての利便性

上記のとおり作成した「石庭授業セット」は、美術教師の誰もがどこでも利用できるということとで開発を進めた。将来的にはいろいろな題材のための授業セットを開発し、貸し出し可能なものとして、教師各々が共有できる授業セットに発展できれば良いと考える。すなわち、「どこでも美術授業セット」として将来的には美術全般的な貸し出し教具構想を築いていければと思う。



図8 「石庭授業セット」掲示用教具

また、「どこでも美術授業セット」構想としては、教具が気軽に移動できるものでなくてはならない。本鑑賞授業「石庭をつくる」では「ミニ石庭セット」

などもあり、やや荷物が多く重量もあるが、できるだけコンパクトにまとめた。



図9 「ミニ石庭セット」



図10 「石庭授業セット」の移動

3) 検証授業の実際

「石庭授業セット」をもとに、授業者それぞれの考えや子ども達の実態に合わせて指導案を作成して検証授業を実践してもらった。

(1) 村田授業の展開

- ① 日本庭園を鑑賞する（5分）
- ② 石庭について考える（7分）
- ③ ミニ石庭を实际につくり日本美を体感する(20分)
- ④ 龍安寺と斑の石庭を比較しそれぞれの良さを感じ取る（8分）
- ⑤ 活動を振り返る（10分）

特徴は、ミニ石庭づくりに時間をかけていたところにある。「協力する、考えて、平らな状態で、石は重ねない、全体の美を考えて」などを条件として掲げ、いろんな日本庭園の紹介も織り込んでいた。

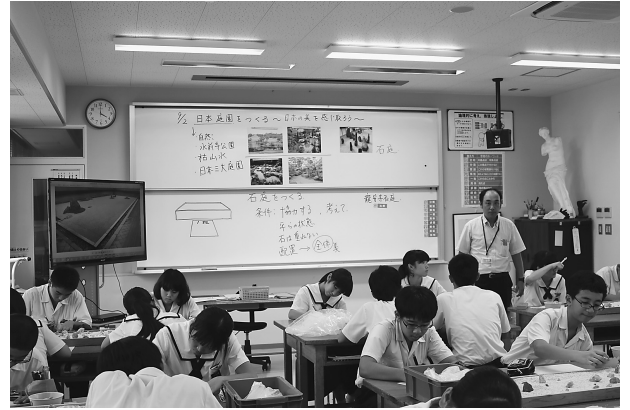


図11 村田授業

(2) 吉田授業の展開

- ① 前時の和菓子制作を振り返り、「和」について考える（3分）
- ② 外国の庭と伝統的な日本の庭を鑑賞する（7分）
- ③ 石庭のつくり方や石の配置の方法を知る(10分)
- ④ ミニ石庭を实际につくり日本美を体感する(15分)
- ⑤ 各班の石庭を見学し、気に入ったものの理由を考える（7分）
- ⑥ 龍安寺の石庭のしくみについて知る（3分）
- ⑦ 学習シートに感想を記入し、発表する（5分）

授業は和菓子制作の振り返りから始まった。日本の伝統美を学習している最中に、検証授業が入ってきたためである。特徴は、③で教師が実際に石庭の作り方を実演する時間が設定されていたことにある。



図12 教師の実演（吉田実習授業）

4) 授業終了時の感想

学習シートにあった子ども達の感想を以下記す。

(1) 村田授業

- ①「大きい石を少なくした。赤っぽい石を中央近くに立てて、全体のバランスを考え、必要な石とそうでない石を分けたり配置を考えたりした」

②「石庭の中に川が流れている様子を作りたいかったため、上流と下流という設定を作り、それと同時に岩の大きさを変えていくことに心がけた」

③「ただ平らに砂をしきつめるのではなく、ギザギザの紙を使い、波や円などの模様を全体のバランスが整うように心がけて作った。また、小石と大きな石をいろんな所に置くことでバランスを整えた」

④「均等に石を置くのではなく、バラバラに置くことを心がけた。ただ、シンプルだけではなく、空間のつりあいが絶妙な感じが日本の美だと思った」

⑤「なるべくシンプルに、でも大小様々な石を組み合わせてバランスをとった」

⑥「中心の石から広がるように置いた。また、正面から見た時にどの角度が石の美しさを引き出すのかを考えて作った」

⑦「自然を意識してアンバランスな位置、石の大きさを心がけた。岩をできるだけ少なくして点々としたものとした。バランスはとれていなくても使う材料の量や位置のつり合いがとれたらよく見えると思った」

村田授業では、砂紋用の厚紙熊手の目は大きい幅20 mmのもので試みた。



図13 村田授業での作庭例

(2) 吉田授業

①「今日は実際に石庭のモデルを自由に作ってみて、全体のバランスや無駄なところはないかなど考えることができました。石の色や大きさを考えたり砂の模様も工夫できました」

②「石を置くだけで美しさが出てくるのですばらしいと思いました。石庭を作った人も美しさを求めているみたいです。小さな石でも美しくなるんだなと思いました」

③「同じ砂の上に石を置くだけでぜんぜんちがう印象がうまれるのでびっくりしました。大きい石だけではなく小石も置くことでまたおもしろいものができるので楽しかったです」

④「僕はこういう庭をつくるのは初めてでした。「つまらなさそうだな」と正直思っていたけど、いかに凸凹を無くすか、石をどこに置かなど工夫することが楽しくなり、プラモをつくっているような気分になりました。昔の人はどんな気持ちで作っていたのだろうと思いました」

⑤「もようをつける作業が楽しかった。「わび」「さび」を考えながらシンプルに、でも美しく石を置くのが難しかった。作りながら和の歴史を感じることができてよかった。こんな風にもけいのようなものを作るのは初めてでわくわくした。日本人が考えた素朴な感じの味のあるふんいきが好きだなと思った」

⑥「白と黒、砂と石のとても質素な感じだけど、石の場所とか砂の線とかで色々感じ方がちがうんだなと思いました。また、シンプルだけど様々な意味が込められていると知りました。石庭をつくる体験ができて良かったです」

⑦「石を置く場所がちがうだけで風景がちがって見えるし、数がちがうだけで広く見えたりせまく見えたりしてびっくりでした。きれいな心でしないと砂がなめになるので落ちついた心が必要だと思いました」

⑧「今日は“わびさび”を意識してつくることができたと思います。京都にある龍安寺にとっても工夫がしてあって、その意図が深いのを初めて知りました。はもんをつけるのもむずかしく、石を選んだり配置を決めたりして楽しかったです」

吉田授業では、砂紋用の厚紙熊手の目は10 mmのものを使用した。



図14 吉田授業での作庭例

これらの検証授業の感想からは、子ども達が、石を多く使ってしまったりバランスを崩してしまったりと、石庭として日本的な美を上手く表現することができなかった反省なども窺えるが、表現においてはそれなりに構成や主題を考えて真摯な態度で制作に向かっていたことが分かる。

3. 考察

1) 「石庭授業セット」の有用性について

(1) 「ミニ石庭セット」の大きさについて

授業中の写真(図13, 14)のように「ミニ石庭セット」は、お互いの机を合わせて行う班活動における大きさとして、龍安寺の石庭の1/35はちょうどよい寸法であった。教師が実演しながら説明する場合の大きさとしても程良い大きさであり、持ち運びの様子やミニ石庭を見つめる子ども達の様子からも適切さを感じた。

(2) 「ミニ石庭セット」の敷き砂と置き石について

20 mmと10 mmの厚紙熊手を再度試すことになったが、やはり20 mmの幅は、砂紋が目立つようになり、敷き砂の文様に気が向いてしまう傾向となる。10 mmが程良い幅の砂紋を作り、置き石による石庭の構成美といった面からも適していると言える。

また、置き石は十分な量を用意したために、子ども達の活動はまず石を選定することから始まった。おおよそ大中小の3種類の大きさに分類していた置き石は、微妙な色の違いもあり、子ども達の意欲的な活動を導き出した。

(3) 「石庭授業セット」その他の教具類について

その他の教具として、指導案や板書例、そして板書用掲示カードを同梱していた。各教師はその指導案を参考に、各学校の実態に合ったものへと改良した。授業者における授業への自由度、ゆとりは大切にされるべきであり、本セットは参考になればその役割は果たされることになる。なお、経験の少ない教師にとっては、吉田実習授業での板書(図7)のように本セットが授業のより所となってくる。

(4) 「石庭授業セット」の移動の利便性について

「石庭授業セット」は「ミニ石庭セット」と指導案や掲示用教具などが入った「その他の教具セット」からなっているが、図8, 9のようにできるだけ簡素にまとめた。図10のように、本セットを授業者が取りに來たり、こちらから届けたりと、自家用車での移動が容易であった。また、宅配便などの利用も考えられる。本セットはやや大がかりなセットではあるが、できる限りコンパクトにまとめ、移動における利便性は十分なものと考ええる。

以上、「石庭授業セット」は体験型鑑賞授業「石庭をつくる」の教具として適切なものであったと判断する。

2) 「石庭授業セット」の魅力について

微妙な色合いを持つ木葉山産の敷き砂と置き石を採用したことは適切であったと考える。「…赤っぽい石を中央近くに立てて…」や「石を置くだけで美しさが出てくるのですばらしいと思いました。石庭を作った人も美しさを求めているみたいです。小さな石でも美しくなるんだなと思いました」という意見からも、子ども達が色について十分意識していることが窺える。「石を置くだけで美しさが出てくる」は、本セットが期待する言葉であり、子ども達が砂と石に対して「美」という観点からも着目していることが分かる。

敷き砂は、最初の整地から、その心地よさが始まっていた。吉田授業では、教師の作庭実演での「邪心があると砂紋は乱れます」という言葉に子ども達は反応し、「…きれいな心でしないと砂がななめになるので落ちついた心が必要だと思いました」などまさしく作庭の行為を体感しているようであった。

検証授業における子ども達の感想には、「シンプルに、色合いも単純だが、自然の様子を表現することが日本の美につながるのかなと思った」や「日本の美とは普段見ているものを少し手を入れて美しいものにしていることが分かった」など、自然と人間の融合について表現しているものもあった。

また、「スペースをどのようにして使うのか」というところが日本庭園では考えられており、「日本の美」はとても考えて作られている美しい作品だと思った」や「日本の美とは質素で誰もが落ち着けるようなものだと思う。誰もが作れそうだけど意外と難しいことが分かった」など「日本の美」について、子ども達なりに捉え言葉として表現しようとしている。さらに、「今まであまり庭に興味がなかったけど、今日勉強をして、日本の庭に興味をもちました。京都に修学旅行に行ったとき見たいと思いました」など、作庭体験が次への自主的発展へと子ども達の心を誘っていることを表す感想も多く見られた。

以上、「石庭授業セット」は使用感から自発的発展への誘いまで、子ども達にとって魅力ある教具であったことは明らかであると考ええる。

おわりに

体験型鑑賞教育における授業での目標は、①「生き生きしてくる」②「審美眼が育つ」③「創造し工夫しはじめる」④「コミュニケーション能力が育つ」⑤「次への自主的発展へとつながる」と考えている。よってそこでの教具の役割は、意欲的な学習へと

誘うこと、美的感性を高め審美眼を育むこと、美的想像力を高めること、コミュニケーション能力を育むこと、次なる自発的發展へとつなぐことと考えている。今回の「石庭授業セット」が子ども達はもちろん、使用する教師にも受け入れてもらったことはうれしい限りである。さらに優れたものを目指し研究を進めていきたいと思う。



図15 「ミニ石庭」筆者作庭例

「石庭授業セット」は美術教師のためのものであり、貸し出し可能なセットとして、教師各々が共有できる授業セットとして考案した。このような教具をいろいろな題材において開発し、貸し出し可能な教具として揃えていけば「どこでも美術授業セット」として美術全般的な貸し出し教具になると考える。

近年学校現場の教師は多忙な環境にある。各々の教師が自分の得意分野についてこのような教具セットを数点開発すれば、教師は教具を貸し借りしたり、開発者の許可のもと複製品あるいはそのセットを参考に新たな教具を開発したりできるようになり、教材研究の労力は軽減されることになる。さらに大きな括りとして、いろいろな教科各領域で共有し合える「どこでも授業セット」が構築されれば教育全般において労力軽減がより図られることであろう。

そのようなことも考えながら、体験型鑑賞教育としての研究を進め、価値ある題材を開発し、魅力的で有用性のある教具を創りだしていきたいと思う。

最後に、研究協力者としての村田崇教諭と吉田香寿美教諭、そして授業の場を快く用意して頂いた熊本大学教育学部附属中学校並びに南関町立南関中学校に深い感謝の意を表したい。

注

- 1) 緒方信行, 2014, 美術科における立体把握のための実践研究～『簡易透視図描画法』による立体および空間の把握～, 熊本大学教育実践研究, 31, 25-32.
- 2) 「知識型」は、いろんなテレビ番組でも取り上げられているような作家、作品研究型である。「対話型」は三澤一実氏（武蔵野美術大学教授）の取り組みなどが挙げられるが、一つの作品を取り上げて鑑賞し、子ども達がいろいろな意見を出し合い鑑賞力を高めていく鑑賞法である。「クイズ型」は、一般的に見られる鑑賞法の一つでクイズ的な導入から鑑賞へと子ども達を誘導していく手法である。
- 3) 平成27年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C））を受諾。平成27年から平成29年度までの3年間の研究で、研究課題名は「体験型鑑賞教育プログラムの開発と実践・評価」である。
- 4) 熊本大学附属中学校平成15年度授業実践研究会で発表した研究授業（題材名「和風庭園をつくる！」）。平成15年9月20日（土）に2年1組の生徒とともに授業実践発表した。
- 5) 寸法については龍安寺のパンフレットにある「東西25メートル、南北10メートル」を参照した。
- 6) 熊本県玉名郡玉東町木葉に在する木葉山の麓の石と熊本礦業株式会社が加工した砂を使用した。

参考文献

- 1) 田村剛, 1972, 作庭記, 相模書房.
- 2) 重森次途, 1970, 日本庭園の思惟〈生成と鑑賞の美学〉, 日貿出版社.
- 3) 斎藤勝雄・和田貞次, 1970, 日本庭園の秘法〈洪さの解明〉, 日貿出版社.
- 4) 河原武敏, 2001, 日本庭園の伝統施設-鑑賞と技法の基礎知識, 東京農業大学出版会.
- 5) 田中昭三, 2002, 日本庭園を愉しむ, 実業之日本社.
- 6) 吉川登, 2011, 「行為としての鑑賞」再考-鑑賞学の基礎理論の再検討-, 美術科教育学会誌「美術教育学」, 第32号, 441-452.
- 7) アメリア・アレナス（木下哲夫訳）, 2001, みる・かんがえる・はなす-鑑賞教育へのヒント, 淡交社
- 8) 岩本康裕, 1990, 「分析批評」による名画鑑賞の授業, 明治図書.
- 9) 上野行一, 2014, 私の中の自由な美術-鑑賞教育で育む力, 光村図書.
- 10) 緒方信行, 和風庭園をつくる！, 2003, 平成15年度授業実践研究会-授業案集, 熊本大学教育学部附属中学校, 43-46.